

書評

Bernard Stevens

Kyoto School Philosophy in Comparative Perspective: Ideology, Ontology, Modernity

Lexington Books、2023年、171頁

松木 貴弥*

1. はじめに

Kyoto School Philosophy in Comparative Perspective: Ideology, Ontology, Modernity は、2023年に出版された Bernard Stevens による論文集である⁽¹⁾。著者の Stevens は1965年ジャカルタの生まれであり、現在はベルギーのルーヴァン・カトリック大学の名誉教授である。彼は当初現象学を専門としており、ポール・リクール（1913–2005）についての博士論文を提出したが、後に日本哲学を研究し、日本哲学をフランス語圏に初めて紹介した人物でもある。代表的な著作として、本書の他に *Topologie du néant: Une approche de l'école de Kyoto* (2000) や *Le néant évidé: Ontologie et politique chez Keiji Nishitani* (2003) などがある。

本書は、著者が1997年から2019年に発表した原稿に加筆修正が施された論文と書き下ろしの論文で構成されており、序論と結論を除いた全九章からなる。検討の対象は、京都学派の始祖とされる西田幾多郎（1870–1945）はもちろん西谷啓治（1900–1990）や丸山真男（1914–1996）、「近代の超克」、和辻哲郎（1889–1960）、木村敏（1931–2021）など多岐に渡る。さらに Stevens は日本哲学の検討のみに留まらず、それらをハンナ・アーレント（1906–1975）やモーリス・メルロ＝ポンティ（1908–1961）、ミシェル・アンリ（1922–2002）などの思想と比較してもいる。本書は、京都学派ないし日本哲学に関する問題系、とりわけ副題にあるイデオロギー・存在論・近代に関する問題系を、ヨーロッパを中心とした西洋哲学と比較しつつ幅広く論じる論文集である。

Stevens は、京都学派についての研究には二つの観点があるとしている。すなわち、①「京都学派を取り巻くイデオロギーの論争を明らかにしようと

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程； takayamatsugi@gmail.com

する試み」と②「時に謎めている西田の思想を、よく知られたヨーロッパの哲学者たちと比較することで解説しようとする試み」である (p. 1)。本書はこの二つの観点に従って各論文が配置されている。最初の四章では上記の①の観点に基づいた論文が、後の五章では②の観点に基づいた論文が並べられる。

2. 本書の内容

上述の通り、前半四章では京都学派におけるイデオロギーないし政治の問題を扱う論文が集められる。Stevens は、京都学派の外部に位置し日本のイデオロギー分析を行った丸山や、スターリン主義やナチスの全体主義について論じたアーレントをとりあげ、彼らの議論を戦中の軍国主義の日本との関わりや「近代の超克」といった京都学派における政治的な問題に適用することで、京都学派の政治的態度を批判しつつ相対化する視座を提示する。それにより、丸山や京都学派の哲学者たちにとって本質的な「近代」の問題へとアプローチする試みがなされる (第 1-3 章)。近代を超克することは、人間と環境の関係を再発明 (reinvent) することであり、それが京都学派のポジティブなメッセージとして考えられるべきであると Stevens は指摘する (p. 61)。また Stevens は、こうした京都学派や戦中日本のイデオロギー分析を、全体主義的なイデオロギーに傾倒した西谷の「政治的誤謬 (political misjudgment)」に特に焦点を当てて考察している。Stevens は、西谷の「誤謬」は、彼の政治的ナイーブさや現実の具体性を見落とした抽象的で思弁的な哲学によるものであると指摘する (第 4 章)。

後半五章では、前半とは打って変わって、哲学的な議論を行った論文が並べられる。ここで Stevens が強調するのは、西谷がいう「西洋と極東の伝統の出会い (the meeting of the Western and Far Eastern traditions)」 (p. 20) である。先に述べた通り、後半五章では、西洋哲学との比較によって東洋 (日本) の哲学者である西田や西谷の哲学思想の内実を解明する試みがなされる。とりわけ西田についていえば、生命や意識の根源を探究するという点で西田とアンリは近接していると Stevens は指摘する。また Stevens によると、「叡智的世界」(1930) 以後の西田哲学における「行為的直観」という概念

は、メルロ=ポンティが論じた人間主体の身体 (*le corps*) やキアスム (*le chiasme*) の概念に対応し、それら为先取りするものでもある。

3. 論評1 西谷啓治の存在論—「空」の立場⁽²⁾

「本書全体が西谷を重要視している」(p. 19) と Stevens が述べるように、本書の議論が依拠しているのは西田幾多郎の弟子であり京都学派の哲学者西谷啓治の哲学である⁽³⁾。とりわけ本書の議論の軸となっているのは、西谷が『宗教とは何か』(1961)で主題的に論じた「空 (*emptiness*)」の存在論である。そして評者の見立てでは、本書は空の存在論 (*Ontology*) を中心として、イデオロギーや近代の問題について論じている。それゆえ、本書の副題において、*Ontology* が *Ideology* と *Modernity* の間に置かれていることは決して無作為なことではない。

簡単に空の存在論について確認しておこう。西谷が空の存在論を提示する背景には、ニヒリズムの克服という主題がある。

Stevens によると、ニヒリズムとは「価値の崩壊、道徳と宗教の道標の喪失、あらゆる精神性を破壊する実証科学の不毛への絶望」のことであり、「人々やその成員それぞれの歴史的事実が、その精神的基盤を失ってしまっているという事実、道徳的、形而上学的、美的価値が失墜させられているという事実、そして社会的で歴史的な生命の全体性とその基盤から引き裂かれているという事実」である (p. 143)。例えば、近代以降の科学は、この世界におけるあらゆる事象は物理的因果によって決定されるとする機械論的世界観を提示してきた。これは、自然を説明可能な自然法則として支配しようとする人間の営みである。ところが、この機械論的世界観によって「人間の働きや生活そのものが全面的に機械化され、非人格化され」という事態が生じる (西谷 10, p. 96)。この時、自然法則を支配してきた人間は逆に自然法則によって支配されるものとなる。人間と自然法則は、互いに支配する／される関係にあるといえる。

西谷によると、この時、人間と自然法則の根底に「虚無 (*nihility*)」が開かれる。人間は、単に自然法則に支配されるだけでなく、それから逃れ、逆に自然法則を支配しようとするものでもある。つまり人間は、究極的には自

身の実存の基盤として自然法則（あるいは神など）を置くことは決してできず、そのような基盤が取り払われた状態で自らの実存を問わざるを得ない。いかなる基盤も持たず、あらゆるものがそれ自身として問われるような場。それが西谷のいう虚無であり、そのような虚無に立脚する立場がニヒリズムである（cf. 西谷 10, pp. 99-100）。

以上のように虚無やニヒリズムを捉えた上で、ニーチェをはじめとするニヒリズムの立場は、虚無に立脚することによって人間が真に自主的であり自由であり得ると西谷は考える。つまり、神や自然法則などの基盤が一切失われた虚無においてこそ、人間は真に自立し、意志を発揮することができる。しかし西谷によると、ニヒリズムの立場は、虚無を人間から見られる限りの「もの」として考えており、その意味で、虚無に立つ人間は自身の中心性を脱していない。西谷にとって、ニヒリズムにおける虚無は、人間という存在者（有）に対して考えられた相対的な「無」、つまり存在者に対立する「もの」としての無に過ぎない。西谷によれば、自己の中心性を脱していない存在者は真の自己を獲得しておらず、有に対する限りの無としての虚無は存在者の根底であるとはいえない（cf. 西谷 10, pp. 107-108）。

西谷は、以上のようにニヒリズムを批判した上で、決して相対的な「もの」として表象されず、真にあらゆる存在者の本質を成立させる立場、つまりニヒリズムを乗り越える絶対的な立場として「空」の立場を提示する。西谷は、空の立場をいい表すために「火は火を焼かず」という表現を度々用いる。火は、観察者としての私たちの立場から見れば、何かを燃やすものとして考えられる。何かを燃やすものが「火」であり、それを見た私たちは「火が燃えている」と考える。しかし、火は火自身を焼くことはない。もし火が自身をも焼いてしまうのであれば、火はたちまち無くなってしまうだろう。つまり、火は何かを燃やすものとして私たちに現れる一方で、それ自身においては燃やすものではない。火という存在は、何かを燃やすものとしての火であることと、何かを燃やすものではないこと、つまり火であることが否定されていること（火でないこと）の両方が同時に重なり合っていることによって成立している。「火は火を焼かず」という表現は、以上の事態を表しており、それ自身である（ $A=A$ ）と同時にそうでないこと（ $A \neq A$ ）が、あらゆる事物の本来のあり方である。西谷のいう空の立場とは、そのような仕方で「そこに於て我々が具体的な人間として、[…] 如実に現成してあるところであ

ると同時に、我々を取り巻くあらゆる事物が如実に現成してゐるところでもある」(西谷 10, p. 102)。

Stevens は以上のような空の立場に基づいて、西谷の政治性や、近代の乗り越えの可能性についての考察を行っている。

上で見た通り、西谷の空の立場は、相対的な存在の次元の根底としての絶対的な次元として提示される存在論であり、その議論は極めて思弁的かつ抽象的な色合いを帯びている。しかし Stevens によると、西谷は絶対的な次元としての「空」の思想を、有限で相対的な次元である政治や国家に押しつけることの可能性をあまりに信じ込んでいた (p. 84)。それゆえ、国家や政権を絶対的なものとみなし、それに個々人を無条件に従わせるような「国粋－全体主義的なイデオロギー (national-totalitarian ideologies)」(p. 73) に屈してしまつたと考えられる。

以上のような西谷の政治的立場への批判は、他の研究で論じられていることと同様である⁽⁴⁾。しかし Stevens は、単に西谷の政治的立場を非難するだけでなく、その基盤となつた空の立場に、近代以降の世界において支配的な「自我中心主義 (egocentrism)」を乗り越える可能性を示唆している (p. 86)。このことは、先に確認したように、空の立場が自己の中心性を脱していないニヒリズムを乗り越えるものとして提示されていることからも見取れるだろう。また、自我中心主義を乗り越えるという点を重く見るのであれば、空の立場が近代の存在論やあらゆる形のナショナリズムや帝国主義、ファシズムを暗に批判していることが見出されるとしている (ibid.)。Stevens は、あらゆる存在者が自己の中心性を脱し、それによつてこそ存在者がそのものとして現れているような空の立場に、単に国家や民族の中心性を主張することとは別のイデオロギーの可能性を見ていると考えられる。

本書を読むと、空の存在論 (Ontology) に基づいた西谷の政治的立場 (Ideology) を問題含みなものとして批判しながらも、空の存在論それ自身に近代を乗り越える現代性 (Modernity) を見出そうとする Stevens の二方向の立場が見取れる。

4. 論評 2 西田哲学の解釈について

第一節で確認したように、本書の後半五章は、「時に謎めいている西田の思想を、よく知られたヨーロッパの哲学者たちと比較することで解読しようとする試み」(p. 1) という観点に基づいた論文が並べられており、特に第6、7、8章が西田を主題的に扱うものである。ここでは、西田哲学がアンリやメルロ=ポンティの哲学と比較され、その共通性と差異が考察されるが、評者の見立てでは、このヨーロッパの哲学者と比較される西田哲学の解釈も、西谷の解釈に負うところが大きい。いいかえれば、Stevens は西谷の解釈に基づいた西田哲学をアンリやメルロ=ポンティの哲学と比較しているように思われる。そのように西田哲学を扱うのは、西谷が西田哲学を「西洋の読者にとってより分かりやすく、時に示唆に富むものにして」(p. 19) いると Stevens が考えており、それをさらに西洋哲学と比較することによって、西田哲学のさらなる明確化を狙っているからであると思われる。

第6章では、西田と西谷それぞれの「実在 (Reality)」についての思想が比較される。Stevens は西田が最初の著作『善の研究』(1911) で行った実在の考究と、西谷が『宗教とは何か』で試みた人間存在の根底や実在の源泉を徹底して考えるという試みの間に完全な連続性 (perfect continuation) が見られると指摘する (pp. 102-103)。

西田が『善の研究』で提示する中心概念である「純粹経験」とは、端的に言えば、主観と客観が別々に分かれたものとして認識される以前の、主客未分的な出来事のことをいう (cf. 西田 1, p. 9)。西田の純粹経験と西谷の議論を共通したものとして考える Stevens の立場は、西谷の西田解釈によるものであると考えられる。西谷は、晩年の著作『西田幾多郎—その人と思想』(1985) において、西田の「純粹経験」は外界から分かれた閉じられた「自己の枠を破つた、いはば宇宙の大きな生命、或いは自然の大きな生命と一つになったやうな立場」(西谷 9, p. 64) としての「無とか無我とかの立場」(西谷 9, p. 69) であると述べる。

なるほど、このような西谷の純粹経験解釈は前節で見た空の立場とも共通する解釈であるし、西田自身も純粹経験を「無意識統一力」(西田 1, p. 12) や「宇宙の統一者であり実在の根柢たる神」(西田 1, p. 145) ともいいかえ

ているため、この解釈は妥当である。しかし、西田は『善の研究』の中で全てと一つになる立場としての「無我 (non-ego)」やそれに類する言葉は使っておらず、西谷の空の立場のように自我の中心性をとりたてて批判してはいない。むしろ、純粋経験はどこまでも「差別相を具へた者」(西田 1, p. 13)、つまりその内にそれぞれの差異や区別を潜在的に含むような出来事であるとしている。

もちろん、Stevens が述べる通り『善の研究』の議論には西谷のいう「無我」の立場ともとれるような記述が散見されるし、同書で西田が試みた「真実在」の考究が、後年の哲学まで一貫していることは事実である (p. 102)⁵⁾。しかし、西田哲学を「西洋の読者にとってより分かりやす」い西谷の解釈に限定し、空の立場に類似した「無我」の立場—「西洋」にはない所謂「東洋」的な立場—を強調し過ぎるあまり、西田哲学のもつ具体性やアクチュアリティを十分に引き出せていないように思われる。実際、アンリやメルロ＝ポンティの哲学と比較しつつ西田哲学における身体について論じられる第7章や8章においても、後年の西田哲学における身体論にとって不可欠な側面である、具体的な物を作ること＝ポイエシスについては論じられていない。

5. おわりに

本論では以下の二つの点を取りあげた。一つ目は、Stevens の議論の基盤には西谷啓治の空の存在論が一貫してあり、西谷の存在論すなわち *Ontology* を軸として西谷や京都学派における *Ideology* や *Modernity* の問題が論じられていること。二つ目は、Stevens が西田と他の哲学者を比較しながら論じる際にも、西谷によって解釈された西田が検討の対象となっており、それゆえに西田哲学のもつアクチュアルな側面が十分に抽出されていないことである。

本書の読解を通して、あくまで西谷や西田の哲学に依拠しつつ、その思想的ポテンシャルを引き出そうとする Stevens の試みが明らかとなった。そして、その試みがヨーロッパを中心とした西洋哲学との比較によって行われている点、それにより「近代」を乗り越える新たな視座を提供しようとして

いる点は着目に値する。評者は西谷のいう「無我」を強調する Stevens の立場を批判的に論じたが、所謂西洋哲学とは異なる議論、論理を展開した京都学派や東洋の哲学（とりわけ *Ontology*）の独自性を強調し、その中に新たな形で「近代 (*Modernity*)」や近代的な *Ideology* を乗り越える「現代 (*Modernity*)」的な価値を見出した本書は、現在の京都学派や日本哲学の研究にとって非常に意義のあるものであるといえる。

注

- (1) 以下、*Kyoto School Philosophy in Comparative Perspective* から引用・参照する場合は頁数を丸括弧内のアラビア数字として示す。なお、引用中の [] は評者による補足である。
- (2) 以下、『西谷啓治著作集』及び『西田幾多郎全集』からの引用・参照は、丸括弧内にアラビア数字で（西谷（西田）（巻数）,（頁数））と表記する。
- (3) 結論において Stevens は、『宗教とは何か』を初めて読んだ時「私がここ数年探し求めていたものをついに発見したような気持ちになった」（p. 141）とも述べる。
- (4) 例えば、菅原潤（2018）。
- (5) 西田は、後年の著作『哲学論文集 第三』（1939）において、「善の研究」以来、私の目的は、何処までも直接的な、最も根本的な立場から物を見、物を考へようと云ふにあつた。すべてがそこからそこへといふ立場を把握するにあつた」（西田 8, p. 255）と述べる。

参考文献

- 菅原 潤 2018『京都学派』講談社。
 西谷_啓治 1987『西谷啓治著作集 第九巻』創文社。
 ———— 1987『西谷啓治著作集 第十巻』創文社。
 西田 幾多郎 2003『西田幾多郎全集 第一巻』岩波書店。
 ———— 2003『西田幾多郎全集 第八巻』岩波書店。